

< 国内情勢 >

石原莞爾研究 (中篇)

天才戦略家「石原莞爾将軍」の功罪

藤 井 巖 喜

(国際政治学者)

「東京裁判」と「石原莞爾」

極東軍事法廷、いわゆる「東京裁判」において、占領軍に臆することなく最も堂々たる日本の自己主張を行なったのは石原莞爾 (1889~1949) であった。

所謂「A級戦犯」の人々も、日本の戦争の正義を語りはしたが、連合国…すなわち戦勝国の側の帝国主義・植民地主義・国際法違反について糾弾することは出来なかった。石原莞爾は最も正々として日本の正義を語ったのみならず、連合国である西洋諸国が歴史的に犯してきた帝国主義や植民地主義の悪行を告発したのである。石原莞爾の軍人としての行動に最も強く反対した者も、流石にこの占領軍に対する石原の捨て身の攻撃には、賞賛の拍手を惜しまなかった。

大東亜戦争という大戦争を戦った日本には、日本の正義があった。しかし東京裁判では、その正義は全く顧みられず、占領軍…すなわち連合国の正義のみが高らかに自己主張された。日本が明治以来、行なったことはすべてこれ、悪徳であるとの歴史観を日本人は押し付けられた。占領軍に対して抗弁したくても日本人にはその自由さえ奪われていた。言論は戦勝国によって完全にコントロールされていたのだ。その点においては、戦争中の日本と何ら変わることがなかった。

こういった言論の自由の全く存在しない環境の中で、占領軍の圧倒的な権力に少しも臆することなく、日本の正義を主張したのが石原莞爾だった。これには内心、全ての日本人が快哉を叫んだ。占領軍がはじめて石原莞爾に接したのは昭和21年3月のことであった。

膀胱の病で東京の**通信(ていしん)病院**に入院中の**石原**に、**アメリカ・イギリス・ソ連**などの検事による臨床尋問があったのだ。その内容は国内では報道されなかったが、**UP電**がアメリカの新聞に発表した。

「日本の作戦上の第1人者石原將軍の談話」との見出しであった。

この**UP電**が逆に日本に伝わる形で、彼の発言が日本人の間にも広まったのである。臨床尋問のはじめに、検事である戦勝国の軍人に**石原**は驚くべき先制攻撃を加えた。彼は「あなた方は実に運がいい。私が日本軍を指揮していたら、あなたたちは生きていなかったでしょう」と言い放ったのだ。

「戦争犯罪者の中で誰が一番罪が重いか？」との問いに対しては、**石原**はにべもなく「**トルーマン・アメリカ大統領だ**」と言い放った。そして彼は枕辺にあった「**アメリカ大統領就任式に臨み、日本国民に告ぐ**」と題した**トルーマン**が日本で撒いたビラを取り出した。これは**トルーマン**が大統領に就任した時、**B29**などのアメリカ軍機から日本中に撒かせたビラである。このビラには、「もし日本国民が戦争に協力するなら、老人・子供・女性といえども、全て爆撃で殺害する」というものであった。

勿論、国際法で非戦闘員である民間人を殺すことは禁止されている。

「日本国民を脅しただけだ」と言い訳がましいことを言ったアメリカ人の検事に対しては、**石原**は次のように言い放った。

「いや、実際にビラに書いてある通り、日本国民を爆殺しました。**B29**は軍事工場だけでなく、一般の人々を爆撃し、**広島・長崎**に原爆を落としました。これは計画的な無差別大量虐殺に他ならない。国際法の蹂躪そのものです。」

またそれからの話の展開が面白い。

占領軍検事が「**満州事変**を指揮したのは貴方ですね？」と確かめる。**石原**は勿論、それを肯定した上で、「**満州事変**もこの裁判でさばきたいのですか？」と逆に質問した。そして「日本の罪をどこまで遡ってさばきたいのですか」と訊(き)いた。

彼らの答えは「**満州事変**は侵略戦争だが、**満州事変**の原因はさらに日本の**日清戦争・日露戦争**である。**日清戦争**や**日露戦争**にまで遡って、日本を裁くつもりだ」と答えた。

それに対する**石原**の答えは、禅問答のようでもあり、最も衝撃的なものでもあった。**石原莞爾**は言った。

「この戦争の一番の原因を作った戦争犯罪人、それは**ペリー**ですね。」

石原は続けた。「日本は**徳川幕府**の頃、鎖国していました。台湾にも朝鮮半島にも**満州**にも全く興味がなかったのです。しかし**アメリカ**から**ペリー**が黒船に乗ってやってきて、大砲で日本人を威嚇して開国を迫りました。日本を帝国主義が渦巻く世界の荒波に引き出

したのはペリーです。またペリー自身が侵略のお手本を示してくれたのです。こうなると日本としても何としても独立を維持し、植民地にはなりたくない。何とか人間らしく生きてゆこうと考えて、アメリカを大先生として、日本も侵略国家になることになったのです。ペリーは日本の侵略の大先生です。どうしても今回の戦争を、歴史を遡って裁きたいというのなら、ペリーをあの手から呼んで、戦争犯罪人として裁いたらいいでしょう。」

流石の戦勝国の検事たちも、苦笑いを浮かべて石原の病室を去る以外に成す術がなかったと伝えられる。これは歴史的に遡れば、誠にその通りである。日本としても何も好んで、帝国主義政策をとったわけではない。ロシア・アメリカ・イギリス・フランス等からの外圧がなければ、日本はあのまま100年も200年も、平和な鎖国時代を続けていたであろう。しかし西洋の帝国主義がそれを許さなかった。

あの時代においては、自らが帝国主義国家になるか、それとも植民地になるかの二者択一しかなかったのである。国が独立を保ち国民が人間らしい生活をするには、日本もまた西洋の真似をして、帝国主義国家になるしかなかった。

石原の思いは日本人総体の思いでもあったであろう。

石原莞爾が正式に東京裁判に証人として出廷したのは、昭和22年5月1日のことである。極東軍事法廷は、証人石原莞爾を喚問する為に、山形県の酒田に出張法廷を開いた。場所は酒田市の商工会議所であった。

当時、石原は、酒田から20キロ離れた開拓地の西山農場で病身を養っていた。

車椅子もない当時、石原は東亜連盟の同志の引くりヤカーに乗って、酒田に到着した。20キロの道は、石ころだらけで、重病の石原にとっては苦痛の連続であった。この場では石原は被告ではなく、あくまで証人として、弁護人や検事の質問に答えた。9時30分に審理は非公開で始まった。

石原は宣誓供述書に署名した。当日の石原は和服であった。

冒頭、石原は「何故、自分が戦犯として裁かれないのか腑に落ちない」と発言し、裁判長や検事を大いに狼狽させた。石原は言い放った。「満洲事変、そして満洲建国の中心人物はこの私である。私こそが、あなた方が重罪人に処そうとしている戦争犯罪人そのものなのだ。なぜ、私が戦争犯罪人として裁かれないのか。腑に落ちない。」

石原莞爾としては自ら被告となって、日本人の大義をこの歪んだ戦争裁判の場で、堂々と主張したかったのである。満洲国建国の意義、アジア開放の大義について語り、連合国の非道を白日の下にさらそうとしていたのだ。

そして日本自らがとった帝国主義的な行動に対しては、アジア諸国に対して潔く謝罪する覚悟であった。この時の石原は完全に死ぬ気である。日本の正義を世界の人道語り、その自らが死刑にされる姿を見せて、戦勝国側の野蛮を自ら証明する決意であった。また日本の無反省な人々に、覚醒を迫る決意でもあった。

自らを戦争犯罪人として裁けという石原の一言は、決してハツタリでもなんでもなかったのである。石原は重病でもあったが、**検事ダニガンの質問にユーモアをもって答え**、時折、傍聴席から爆笑を呼び起こすほどであった。

そして裁判長も検事も石原のことを「ジェネラル石原（石原将軍）」と敬称をもって呼んだ。当時の様子を酒田法廷で撮影した写真家・三木淳は、次のように回想している。「**検事の厳しい尋問にも平然と答える石原将軍の論旨は、いささかも揺るがず、武人の立派さを見せつけられた。あまりの立派さに感動して、リヤカーで帰られる将軍についていった。『日本は必ず復興する。その為には、君たち、若い人たちの力が大切だ』と懇々と諭された。**

この証人喚問を傍聴した1外国人記者は次のように語っている。

「**実は日本に上陸して以来、初めて、将軍のような人に接し、頭から冷水を浴びせられたような感じがした。**」ある日本の新聞記者は次のような言葉を残している。

「**今、極東裁判では、日本のかつての指導者たちが裁かれているのだが、日本人として、もつと毅然とした態度であってほしかった。東京法廷で傍聴していて、あのアチラになびく態度を見るにつけ、日本人として恥ずかしい限りであったが、今日、この法廷で将軍の言葉を聞き、日本人としては嬉しくてしょうがない。**」

尚、この酒田法廷の前日、4月30日の夕刻には、数人の外国人記者を含めた記者会見が開かれた。石原は「これから話すことは、マッカーサーの検閲を受けて日本では発表が禁止されるから、自国に帰ってから発表してほしい」と外国人記者に依頼している。石原はこの場で、日本がアジアの諸国民に迷惑をかけたことを率直に詫びた。日本が、欧米諸国がやってきた帝国主義を見習ったのも事実だが、反面、日本人の心の底にはアジアの解放という思いがあったことを訴えた。

またアメリカの**無差別爆撃や原爆投下は国際法違反の非人道的な行為**である、自分が首相だったらアメリカに賠償を請求すると語った。また、日ソ中立条約を一方的に破ったソ連の参戦とシベリア抑留の捕虜の虐待は、非人道的な暴虐行為であるとも主張している。